

果たして芸術を求める採点競技（新体操）は、競技として成り立つのか・・・

Can scoring sports with Artistic Qualities be Considered Sports?

1K06A0289

指導教員 主査 石井昌幸先生

井上 実美

副査 寒川恒夫先生

【本研究の目的】

スポーツには、その勝敗の決定の仕方はいくつかのタイプがあり、次の4つのタイプに類型化してみた。

陸上競技や競泳のように、結果が数量化でき、その速さや距離などを競うもの。

サッカーやバスケットボールなどの球技のように、相対する2つのチームが、試合中にあげた得点の多寡を争うもの。

体操競技、新体操、フィギュアスケート、シンクロナイズド・スイミング、ダンス（コンペティション）などのように、第三者による採点によって勝敗が決まるもの。

ボクシングや柔道、レスリングなどの格闘技のように、ノックアウトや一本勝ち、フォールのような一回で決まる決定法と、審判団による採点を併用しているもの。

本研究テーマである新体操は、タイプに分類される採点競技であるが、競技性と芸術性との非常に困難なバランスの上に成り立っている。新体操の歴史は、この相反する2つのベクトルのあいだで、つねに葛藤を繰り返してきた。本研究では、そのことを歴史的に跡づけながら、新体操における技術性と芸術性との問題について考察してみたい。そして、芸術性からかけ離れてしまった現在の新体操について、シドニー

オリンピック・アテネオリンピック・北京オリンピック映像を元に、この8年間に起きた凄まじいルール改正について考え、本来である新体操のあるべき姿を見出し、今後の新体操の行く手について考えることを目的とする。

【第一章 新体操の歴史】

新体操はドイツの「芸術体操」の1つから始まった。それからヨーロッパを中心に広がり、日本には1967年の第3回世界選手権（コペンハーゲン）の大会に、藤島八重子、加茂佳子の両氏が赴き、それをきっかけに視察に新体操の普及が急速に高まった。それ以降、さまざまな国際大会に出場し、1984年のロサンゼルスオリンピックで、新体操が正式種目として認められ、現在にいたる新体操の姿になった。その中で、大きな変化を遂げていったレオタードは、時代によってさまざまな役割を担ってきた。

【第二章 不正ジャッチ】

シドニー・アテネ・北京オリンピックの8年間に起きた、不正ジャッチを取り上げることで、採点競技のさまざまな問題点が浮かび上がってきた。観客の評価と、審判の評価の違い。これこそがまさしく、採点競技の永遠のテーマ。

【第三章 ルール改正】

4年に1度大きく改正されるルールからみえる新体操の変動から、シドニー・アテネ・北京オリンピックの映像から、演技の移り変わりを分析した。結果、大きな数値としての変化は見

られなかったが、演技の内容の変化、スキルの上昇、アーティスティックの要求度など、スキルとアーティスティックの関係性の変化が見受けられた。

【第四章 新体操王国～ブルガリア】

とても芸術性の高い演技をするとブルガリア新体操は評判がいい。なぜなら、新体操は芸術で無ければならないのであるからだ。ブルガリアは新体操を国技としている。黄金時代を築き、新体操の芸術とは「音楽と手具と身体の融合である」と説いた。ブルガリアを代表する元ナショナルコーチである「ネシカ・ロベバ」のインタビューを参考に、今後の新体操のあるべき姿を明らかにする。

【終わりに・・・】

新体操は果たしてスポーツとして成り立つのかという疑問だが、それは選手自身が何を求めるかによって、変わっていくのであろう。